



32年ぶり社長交代

アップデートし続ける

——社長就任に当たっての抱負は。

山口社長 大きく二つある。一つは事業規模を拡大させることだ。当社が手がける情報通信インフラを支える通信機器やソリューションの提供価値を最大化させ、売り上げや利益を着実に伸ばしていきたい。

二つ目は組織力を上げることだ。業績だけ上げて、企業としての実力がなければ意味がない。社員のやりがいも高めることで、会社全体の成長を目指す。

——情報通信分野で事業を展開し、60年以上の歴史があります。

山口社長 当社は、放送や通信といったインフラ基盤を支えてきた。技術の発展でこれらの基盤はますます

重要な存在となっている。AI(人工知能)が想像を超えるスピードで生活に浸透しているように、放送・通信インフラもアップデートし続けなければならない。そうした意味からも、当社の事業は社会的な価値のあるものだと考えている。

インフラをアップデートするためには、最先端の技術を吸収し続けなければならない。社員の生産性を高めることも必要で、社内でAIも積極的に活用していく。

——32年ぶりの社長交代の背景は。

山口社長 前社長の山口(正裕)会長には、以前から「いつ交代してもいいように心の準備はしておくように」と言われていた。実際、社長交代の意思を伝えられたのは昨年で、伝えられた時も驚くこともなくすつと受け入れることができた。

シンクレイヤが32年ぶりに社長を交代した。3月26日付で代表取締役社長に就任したのは山口倫正氏だ。高速化する情報通信インフラの“裏方”である同社を今後、どう成長させていくのか。5月1日に35歳を迎える山口社長に方針を聞いた。

父でもある山口会長とは事業の方向性で大きくぶつかったことはない。山口会長は文系出身。私は理系出身で、考え方などをうまく補完し合えていると思っている。

MBA取得 経営にも本腰

——理系出身であると、経営面で苦労することもあるのでは。

山口社長 それもあったが、使命感の方が強かった。理系出身者にとって経営は範囲外のこともあるが、ゆくゆくは会社の経営に携わること

になると思っていたため、コロナ禍にはグロービス経営大学院に通い、MBA(経営学修士)も取得した。

MBA取得時に共に通った仲間は、飲食やブライダル、大手企業、スタートアップなど多岐にわたる。ジャンルをまたいだ関係を築けており、今でも情報交換などを行い、貴重な財産になっている。

——社長就任前には広報室長を務め、認知度アップにも力を入れていました。

山口社長 当社の事業は裏方だ。必要とされている事業だということ、一般的な方にも社員にももっと

山口倫正

シンクレイヤ代表取締役社長



進化続ける企業めざし「超長期目線」も重視

山口倫正

シンクレイヤ
代表取締役社長

知ってもらいたいと思って取り組んできた。存在を知ってもらえれば、ビジネスの幅も広がると考えていた。新しい取り組みとしてYouTubeやPR TIMESで積極的に情報を発信するなど、対外的なアピールを強めた。社員にとっても社会的な意義が強い事業であることを認識してもらおうきっかけにできたのではないと思う。

「業績」と「功績」 2軸で進める新事業

——AR（拡張現実）サービスなど新領域への取り組みも加速しています。

山口社長 人口減少など避けようのない社会的な課題といった「壁」があることも事実。こうした壁を乗り越えるためには技術が必要になる。当社は通信インフラの高速化といった実績で地域をサポートしてきた自負がある。ただ、インフラを提供しているだけでは駄目で、新たなサービスの立ち上げも進めていかなければならない。

昨年には青森県で開催された「青森ねぶた祭」にARサービスを提供し、ユーザーからも高い評価を得た。

新サービスはまだ事業の柱になるほどの規模ではないが、顧客の課題に寄り添ったソリューションとして提供できるようにしていきたい。

——エンドユーザー向けサービスの

提供も視野にありますか。

山口社長 B2C（消費者向け）はやるつもりはない。B2B2Cといった立ち位置が合っていると思っており、B2Cに近い事業者とかかわることでノウハウや考え方などを学び、当社の事業に生かしたいと思っている。

新規事業は、「業績」と「功績」の2軸で考えるべきだ。新たなサービスも当社のメインストリームである最先端の情報基盤の上で動いている。新サービスが業績に寄与するという側面だけではなく、サービスを動かすためのインフラとして、当社の技術や製品、ソリューションが生きているということを社員が認識することで、社内の活性化や組織力の向上につながる功績という側面も重要だ。

新規事業は30代といった若い世代が部署を横断したプロジェクトチームを組んで推進している。当社を盛り上げてくれる世代に担当してもらうことで、良い効果を生み出していきたい。

——今年度は中期経営計画「PLAN 2026」の最終年度になります。

山口社長 中東情勢の影響が直接業績に出てきているわけではないが、調達部品のリードタイムが伸びたり、サプライヤーの価格に影響してきたりする可能性はある。ただ、現状では計画通りに業績は推移している。

企業として存続していくためには、

継続的な成長が不可欠。通信インフラは堅実な需要が見込めるため、中期的な目線を重視したい。

山口会長は30年以上社長を続ける中で、持続的な成長をけん引してきた。来年からは次の中期計画を実行する段階になるが、私も30年といった「超長期目線」のビジョンを持ちつつ、中期計画を実行していきたいと思っている。

ニーズより先に インフラを進化

——超長期目線で描くシンクレイヤの未来像は。

山口社長 最先端の情報通信技術を社会に実装するという当社の使命を実践し、顧客にとって価値あるものを提供していくことが大事だと思っている。新技術は最先端インフラの上でしか動かない。例えば、PON技術の世界最速規格「50G-PON」による50Gbps高速通信の商用サービスを開始したが、新サービスや新技術の実装には、一般消費者のニーズに先んじる形でインフラが進化していく必要があると思っている。



YAMAGUCHI Norimasa

1991年5月1日生まれ。2014年3月名古屋大学工学部卒。18年4月シンクレイヤ入社、23年4月経営企画室長、24年3月取締役経営企画室長、25年3月常務取締役技術生産本部長兼広報室長、26年3月代表取締役社長（現職）。趣味はピザ作り。400℃以上の高温で焼き上げることができる電気式ピザ窯で、本格的な手作りナポリピッツァにこだわっている。

今は変化が激しく、人材流動性も高い時代。30年先の社会や会社のあるべき姿を今から決めてしまうことは難しいし、その通りにいかないこともある。超長期目線を持ちつつも、3年や5年といった視点で社会や会社を客観的に見て、常にアップデートしていける企業でありたいと思っている。

シンクレイヤ、新たな成長領域開拓へ ARとWi-Fiセンシング活用

シンクレイヤが、AR（拡張現実）事業と安否確認支援サービスの提供に乗り出している。持続的な成長を目指した新たな事業領域への挑戦で、B2C

（消費者向け）事業者と連携することでエンドユーザーに近いニーズや運営ノウハウなどの吸収を狙っている。

同社は昨年7月、青森ケーブルテレ

ビ（青森市）と協業し、「青森ねぶた祭」でARサービスを提供した。スマートフォンのカメラにねぶたが出現する「ねぶたAR写真」で、ねぶたの前で写真を撮りにくいという課題に応えるサービスとして提供。ねぶた小屋の看板にカメラをかざすと、制作者へのインタビュー動画を視聴できるAR動画サービスも併せて提供した。

12月には、AI6（東京都港区）と協業して開発した単身者向け安否確認支援サービス「でんばでみてるくん」の提供を開始。Wi-Fi電波の変化を捉えて居住者の動きを検知し、一定期間動きが確認

できない場合は自動でアラートを発報する仕組みだ。

カメラやウェアラブル機器は不要で、専用端末をコンセントに差し込むだけで簡単に設置でき、居住者の在室状況を把握可能。プライバシーを守りながら孤独死など社会課題の解決への貢献を目指したサービスになる。不動産管理会社などへの提案を進めている。

これら二つはB2Cに近いサービスで、シンクレイヤにとってこれまでの枠組みを超える新たな事業への挑戦になる。山口倫正代表取締役社長は「新規事業でB2C事業者が持っている強みを認識し、当社の強みを生かせる領域を増やしていきたい」と話している。



新サービスとして提供した「ねぶたARフォトフレーム」